



Title	<書評>Christopher Johnson, "System and Writing in the Philosophy of Derrida", Cambridge University Press 1993
Author(s)	小川, 歩人
Citation	年報人間科学. 2015, 36, p. 157-161
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51227
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈書評〉

Christopher Johnson***System and Writing in the Philosophy of Derrida***

Cambridge University Press 1993

小川 歩人

はじめに

本書はノッティンガム大学教授であるクリストファー・ジョンソンによって書かれたジャック・デリダの研究書である。ジョンソンの関心は、当初から一貫してフランス現代哲学と科学技術、生命科学、サイバネティクスなどにあり、デリダだけでなく、アンドレ・ルロワ＝グーラン、レヴィ・ストロースなどについても著書がある。また、デリダが「動物を迫る、ゆえに私は〈動物〉である」を発表した1997年のコロック「自伝的動物」にも参加している¹⁾。本書における著者の狙いも上記のような関心から外れるものではない。本書において、ジョンソンは、デリダの著作を通した「エクリチュールの一般理論」を提出し、また、システム理論、情報理論、分子生物学、サイバネティクスとの同時代的な共鳴を示すことで新たな学際的視座を開くことにある。

しかしながら、このような著者の試みは、いささか奇異な印象を読者に与えるかもしれない。デリダといえば、構造主義から受け継いだ「言語」的理論装置を用いて、フッサール現象学を筆頭に現前の形而上学、ロゴス中心主義の脱構築をおこなったというのが、初期の理論的著作の理解として一般的である。そして、ある種の記号論的理論は、脱構築批評という形で英米の文学理論と結びつき一つのムーブメントとなった。また、『散種』、『郵便葉書』といったパフォーマンス的なテキスト実践は実際にテキストと戯れ、文学と哲学を横断するデリダという印象を後押しするものでもあっただろう。だが、文芸批評でのデリダの消費は、「無限のポリセミー」、「破壊的批評」、「ニヒリズムの哲学」などという前段以上にステレオタイプ化され誤解を招くデリダを生み出す結果ともなった。

例えば、高橋哲哉は、このような「従来の（文学理論家としての）デリダ像が一面的であることを実感してもらう」ために『デリダ—脱構築』（1998年）を書いたと述べている。いわゆる「政治的転回」を徴づける1993年の『マルクスの亡霊たち』を機にデリダは「正義」、「歓待」、「責任＝応答可能性」、「決断」、「来るべき民主主義」といった政治的、倫理的諸テーマの分析を晩年まで続けていくこととなるが、高橋はこのような「政治的デリダ」と初期の「理論的デリダ」を接続することで新しいデリダ像を示そうとした²⁾。

ジョンソンは前世代のデリダ読解から距離をとるという点で、高橋と同様の関心をもっていただけであるが、本書の試みは高橋のものとも異なっていた。著者は、それ以前の「テキストの戯れ」、文学と哲学を

交錯させるデリダを称揚した脱構築批評に対するオルタナティヴを提示することを一つのモチベーションとしていたが、本書は、その出版年からも分かるように高橋が引き立てたような「政治的デリダ」以前のデリダを扱っているのである。

本書では脱構築批評と「政治的転回」の狭間において、脱構築批評が称揚した「文学的デリダ」とも、高橋が提示した「政治的デリダ」とも別様のデリダの姿、その「原子論的」、「物質的側面」(p.11)を提示しようと試みているのである。

本書の分析は、イントロダクションから始まり、『エクリチュールと差異』を中心に「スクリプトモデル」を検討する前半部（第一章、第二章、第三章）と『散種』以降の生物学的、「生殖的モデル」を検討する後半部に分かれ、技術論的性格を強める第三章のフロイト論から科学、生物学との対話が随所でおこなわれる。以下、ジョンソンによるデリダの詳細な読解の全てに立ち入ることはできないが本書の議論を内容に沿って概観したい。

イントロダクション

ジョンソンは、戦前、戦後のソシュール言語学を基盤として発展した構造主義的パラダイムが学際的領域を開いたことを評価しつつも、戦後登場する新しい科学（情報理論、分子生物学、サイバネティクス等）と呼応しながらコード、順列組み合わせを主要な方法論とするミシェル・セールのネオ・ライプニッツ主義的パラダイムの展開に注目する。後者の運動は、単に「言語」というよりも、更に一般化された領域を対象としており、ジョンソンは、この「言語」から「スクリプト」への移行を構造主義からポスト構造主義の移行とみなしている (p.4)。

ジョンソンは、デリダの生物学、サイバネティクスのエクリチュールへの言及から、デリダの「エクリチュール＝書かれた言葉 writing」、「書き込み inscription」、「痕跡 trace」、「プログラム pro-gram」が単なる「言語」以上により一般的な哲学素であるとし、ポスト構造主義的な変化をデリダにみるのである。

書き込み inscription モデル

ジョンソンは、第一章において『エクリチュールと差異』冒頭の「力と意味作用」を考察している。デリダによる構造主義文芸批評を扱ったこの論考を、ジョンソンは、その詳細な読解にも関わらず、文芸批評的な内容ではなく、理論モデルの分析に焦点をあて分析している。脱構築的操作、文学論の内容ではなく、理論モデル、技術性へと注目する本書の読解の特徴である。

「力と意味作用」において、デリダが批判するのは、構造という形でテキストの全体性を仮構し、テキストの多産性を還元してしまう構造主義批評の態度である。デリダはこの構造主義的読解に対し、批判対象であるジャン・ルセットの『形式と意味作用』をパロディ化する形で、まずライプニッツ的な「力」、ベルクソンの「持続」といった質的概念を対置する。しかし、デリダは単に構造主義批評に対して純粋な差異、純粋な生成を対置するのではない。構造は汲みつくし得ない力の剰余を縮減してしまうが、力は何らかの形で「現働化 actualization」、「分節化 articulation」されなければそれ自体何の意味ももたない。

そして、エクリチュールの書き込みが力の暴力的な現働化の瞬間、「受苦 passion」の契機として「始動的 inaugural」であり、テキストは形式と力の狭間に位置するものとなる。このようにジョンソンは、デリダが「エコノミー」と呼ぶ、形式と力が常に絡み合う関係性を読解からとりだしていく。

デリダの多用するモチーフである「戯れ jeu」の英語訳 free play に対するジョンソンの批判をこのような観点から理解することができる。デリダにおいて「戯れ」は端的に無無限の自由、解釈可能性を意味するものではなく、あくまで、コード、システムの必然性との関係の中で「緩さ looseness」として捉えられなければならない。

また、書き込み以前には何もなく、意味は常に既に「二次的 secondary」なものでしかないというデリダは述べるが、この奇妙な時間性は、これ以後のデリダの理論的モチーフとしてより強調されていく「事後性」、「遅れ」の問題とともにデリダの理論装置の特異な時間性を示すものである。フロイト、レヴィナスといった哲学者らとの対話により練り上げられていく要素を「力と意味作用」において、既に確認することができるのである。

ジョンソンの読解は、これをはじめとして、デカルト、バタイユ、アルトーなど多様な内容を含む『エクリチュールと差異』の議論から、力と形式のエコノミー、現働化の瞬間性、二次的時間性などといったデリダの理論的布置を、いささか暴力的な形で内容を捨象しつつ、一貫性をもった形で分析している。ここではそのすべてを紹介できないが、えてして、無限に散乱するかのように思われるデリダのテキストにジョンソンの読解は一定の方向性を与えていると言えるだろう。

生殖的隠喩、原子論

ジョンソンの読解のもう一つの軸は、デリダの原子論、生殖的モチーフへの注目である。スクリプトモデルから、原子論、生殖的モチーフへの移行は、デリダの議論の射程を拡大しようとするジョンソンのデリダ読解の方向性を支持するものである。

ジョンソンが注目するテキストの一つは、『プシケー』所収の「私のチャンス—いくつかのエピクロスの立体音響とのランデヴー」である。この論考においてデリダは自身のスクリプトモデルとルクレティウスをはじめとする原子論との関係を示唆している。原子論者の stoikeion という概念は、それ自体、言語と現象の両義性を持ち、また、複雑系の基礎となる組み合わせの原則を示唆するものでもある。そして、必然的な原子の落下の系列と偶然性を導入する原子の非物質的揺れ、クリナーメンの絡み合いは上述したデリダの戯れとも適合するものだ。

また、ジョンソンは「語は胚である the term is a germ」³⁾あるいは「散種 dissemination」という表現にみられるような『散種』以降の生殖—発生論的隠喩の増殖についても、生物学者フランソワ・ジャコブ、ジャック・モノーらの分子生物学の DNA あるいは RNA の議論、あるいは後述するシステム理論と、例えば、デリダが「書物外」でヘーゲルに対して仕掛けた隠喩的戦略とが関連させられながら論じられる。

デリダは、「白い神話」において、西洋哲学における理論的概念から隠喩を切り離し、貶しめる態度を批判し、その中でカンギレム、バシュラールに触れつつ、科学的理論形成においてさえ、隠喩性が重要な役割をも

つことを指摘していた。ジョンソンの上述のような視点は、隠喩論の立場から生命諸科学における隠喩と概念の絡み合いに注目した「白い神話」の議論をデリダ自身のテキストへ生命諸科学の方向から逆照射するものだろう⁴⁾。

デリダのエクリチュールと一般システム理論

本書の各部分で、デリダのスクリプトモデルと現代生物学、サイバネティクスの再生産、複雑系の規則、情報、コーディング、伝達といったモチーフとの関連が指摘されるが、第5章「進化と〈生命〉諸科学」での生物学者ルートヴィヒ・フォン・ベルタランフィによる一般システム理論との比較が行われる。ジョンソンは、システム理論が提示する問題を挙げながら、前章までの議論と直接的に関係をもつ「開放システム」、「目的論」、「コード」の概念に焦点を当て比較を行う (p.143)。著者の指摘は、構造主義に対して閉域の開放性を、パロールに対して反覆可能性をもったコード、プログラム、エクリチュールについて語るデリダについて、親近性の高いものであるだろう。

目的論についてのアナロジーは更に興味深いものかもしれない。システム論はそれ以前の科学がとっていた因果関係モデルに対して「等結果性 equifinality」あるいは「多結果性 multifinality」を主張する。等結果性は異なる諸条件が別様のプロセスを経て、同じ最終状態に至る事態であり、多結果性は似たような諸条件が異なる最終状態に至る事態である。ここに恐らくジョンソンは緩さ looseness の議論と、同じものが反復しながらも異化作用を含みこむ「反覆 iteration」あるいは「散種 dissemination」のデリダ的モデルをみてとっている。

ただしジョンソンは、デリダの隠喩性に注目しつつ、極めて慎重に論を進め、他の領域からデリダの複雑なシステムを説明したいわけではないと留保をつけているものの、安易にシステム理論における目的論とデリダの議論を接続しているように思われる部分もある。ジョンソンはデリダが必ずしも目的 telos を排除せず、変様させた形で捉えなおしていると考えておりその解釈自体はすぐさま否定しなければならないものではない。また、このジョンソンの解釈は脱構築批評的な「戯れ」解釈 free play に対して緩さ looseness をもちだす過程で、デリダの理論モデルの中で規定的な運動性を強くとっていることとも関係しているだろう。しかしながら、晩年のデリダが出来事について語り、「プログラミング不可能なもの」との関連を述べることを考慮すると、プログラム概念を重視するジョンソンの解釈を、たとえそれがデリダと諸科学との同時代的な影響関係を述べるにとどまったとしても、無批判に受け取ることはできないのではないか。評者はシステム理論の専門家ではないため踏み込んだ発言は避けるが、等結果性に対して多結果性についての言及が少ないこともジョンソンの解釈の検討を要請するように思われる。

おわりに 隠喩と隠喩以上のもの

ここまで、本書の内容を概観してきたが、デリダの一般的理論を提供するという観点からは、90年代初頭に出版されたという時代的制約を考慮しても、デリダの議論全体をカバーするものではない。前述の通り、脱構築批評への距離、また本書の性格上、文学、隠喩、言語論的テキストの内容はほとんど捨象さ

れている。

他にも、例えば、最初期からの現象学との対決についてはほとんど触れられていない痕跡のある種の徹底的な遠さは、差延論文で述べられるようにレヴィナスの痕跡、ハイデガーの存在論的差異などと近いものであるが、それらの検討を排したジョンソンの分析は痕跡への言及にもかかわらず（そして、痕跡は非場所的、非実体的とジョンソンが述べるにもかかわらず）、しばしば、あまりに痕跡を実体化しすぎているように思われる。これはジェフリー・ベニントンのベルナル・スティグレルへの批判と相似的なものであり、技術論、科学論としてデリダを読む困難の一つでもあると言える⁵⁾。

しかし、ジョンソンの「デリダと科学」という論考に対するデリダの応答に目を向けたい。「デリダと科学」は、*Revue internationale de philosophie* 1998年第3号「デリダとその応答」と題された特別号において、デリダへ向けられたものである。論考の内容は本書の内容からデリダ読解を省略し、題名の通り、デリダと科学との関わりを抽出した形の論考となっているが、これに対するデリダの応答は好意的なものであり、「科学は思考しない」とするハイデガーに対する態度として極めて重要なものである⁶⁾。

未だ読み解くことの困難な『弔鐘』、『絵葉書』、『割礼告白』といったテキスト、政治的著作にさえ登場する生物学的隠喩（「自己免疫」等）、晩年の技術論、動物論、あるいは未刊行の「生死」講義でのジャコブ、カンギレムの取り扱いなど、膨大な範囲にわたるデリダの議論を読解していくためには、最初期から続く現象学、精神分析との関わりを頼りにするのみでは困難な部分がある。ジョンソンが自ら述べるように、本書の読解は単にある一つの読解の可能性ではあるが、いかにして「隠喩と隠喩以上のもの」が絡み合うデリダの著作を読み解くのかという課題を前に、デリダの死後10年経った現在から本書の試みを評価することは無駄ではないはずである。

注

1) *L'animal autobiographique: autour de Jacques Derrida* Paris: Galilée. pp.353-368

2) 高橋哲哉『デリダ—脱構築』講談社 1998

3) 例えば Jacques Derrida, *La dissémination* Paris: Galilée. p.338

4) 「白い神話」、『哲学の余白』所収、藤本一勇訳、法政大学出版、2008

5) Geoffrey Benington, "Emergencies", *Oxford Literary Review* 18 (1996): 175–216

6) 「この紙面の制約の下で」あたかも可能であったかのように『パピエマシ』下所収、中山元訳、ちくま学芸文庫、2005、また "Derrida and Science" Collected in *Questioning Derrida. With his Replies on Philosophy*, Ashgate, 2001 pp.84-95 参照。デリダは更に、情報理論、生物学への脱構築の応用を特権視するジョンソンの論考を越えて、プロトニツキーによる数学、量子力学への言及にさえ積極的に応答しようとしている。

